

未来をつくるために

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

1 忘れられた人々～1945年8月のサハリン

1945年8月15日正午、日本列島に、昭和天皇の肉声によるラジオ放送が、流れました。いわゆる「玉音放送」です。これで1931年の満洲事変から始まる約15年間に及んだアジア・太平洋戦争（その後半は第二次世界大戦と重なります）が終わったとされています。今でも8月15日が終戦記念日です。

しかし、皆さんは考えたことがありますか。8月15日に戦争が“終わらなかった”人々が大勢いることを。昭和天皇が、戦争は終わったと宣言した後にも、戦争状態のなかに生きなければならなかった人々が大勢いました。

例えば、当時は日本領だった南樺太（北海道の北にあるサハリン島の南部）の人々は、8月9日から日本に総攻撃を仕掛けてきたソ連軍による激しい空襲の中を逃げまどっていました。山々に立てこもりながら抗戦をしていた日本軍第125連隊は、8月15日に玉音放送を聞きました。でも125連隊の存在は忘れられていて、本部師団から何の連絡もありません。命令がない以上、戦い続けるしかなかったのです。16日も17日も18日も激しい戦闘が続きます。西海岸の町、真岡は、20日にソ連軍の上陸作戦に直面し、逃げまどう市民が無差別な銃撃を受け、戦死していきました。真岡郵便局の電話交換手をつとめていた女性たち12名が、外との連絡を担う自分の職務を放棄せずに留まりますが、最後は戦火のなかで9名が集団自決します。「皆さん、これが最後です。さよなら、さよなら…」が、彼女たちの最後の電話連絡となりました。

今日の私の皆さんへのメッセージその1は、「忘れられた人々をつくってはいけない」です。今から75年前の人々は、まだ戦争のなかにいる人のことに気づかず、誰も助けようとしなかった。

今の日本社会に視線を移してみましょう。ヒロシマ・ナガサキの原爆の後遺症に今もお苦しんでいる人がいる。フクシマの原子力発電所の事故で今もお故郷に帰れない人がいる。放射能の廃棄物・汚染水が増えていくなか、いつ地震や災害で放射能汚染が再びおこるのではないかと恐れている人々がいる。コロナ禍の今、多くの人々と接触をしながら支えている人々～医療、福祉、流通、交通などに携わる人々がいる。でも私たちは、自分の日常生活から見えない、こうした人々のことを、忘れていて。誰かが苦しんでいるのを見捨てている。誰かが危険のなかで一生懸命働いているのに感謝していない。

誰かを忘れてしまう社会は、人を大切にしない社会です。人を大切にしない社会では、皆さん自身も本当に困ったとき、忘れられるでしょう。そんな社会をつくってはいけないのです。

2 満洲の集団自決を生きのびた人

アジア・太平洋戦争の末期に、中国大陸の満洲国（これは日本が満洲事変という軍事行動によって建設した国家で、実質的には日本の関東軍が支配していました）に渡っていた満蒙開拓団の約25万人も、「忘れられた人々」でした。

そもそも満蒙開拓団とは、征服した満洲の日本人を増やすため、軍隊と政府が一体となって、日本国内の貧しい地方の人々に、移住すれば日本とは比較にならない広大な土地を手に入れて、豊かな生活ができると宣伝して（時には学校の先生たちがその宣伝の先頭に立って）、大勢の人々を送り出したのです。長野県は、全国でも最もたくさんの満洲移民を大陸に送り出しています。こうした人々が不安に満ちた胸をどきどきさせて満洲の大地に立ったときに見たものとは、これから開拓をしなければならない広大な原野ではなく、すでに存在した農場でした。それらは日本の現地機関が中国人から取り上げた土地だったからです。開拓民は日本にいたときには想像もつかなかった広大

な農地を一夜にして手に入れ、さらには自分の農場で中国人を働かせる“地主”の生活を始めていくことになったのです。

ところが戦争の状況が厳しくなり、敗戦が濃厚になってくると、日本陸軍は満洲国にいる兵士の多くを別の戦いの場所に移動させてしまい、満洲国そのものにはほとんど兵士が残っていない状況でした。関東軍は、最初から満洲移民を守ろうとは考えておらず、敗戦間際において、女性と子どもたちと老人を、丸裸同然の状態で満洲国に放置したわけです。それゆえ8月9日にソ連軍の侵攻が始まったとき、彼らは広大な中国大陸に取り残され、ソ連軍の砲撃と中国人の逆襲のただなかに投げ出されたのでした。

当時14歳であった少年・久保田諫(いさむ)さんは、故郷の長野県下伊那郡(現在の豊丘村)から満洲に入植していました。電灯もラジオもない生活だったので、久保田少年たちが玉音放送の情報を聞いたのは、隣の村の開拓団からの連絡を通してでした。中国人に攻撃される恐れがあることから、いったん村のみんなで丘の上に避難し、いったん食事をとるために自宅に戻りました。そこで彼らは、何百人という中国の群衆に取り囲われます。群衆は棍棒をふりかざして開拓団の家々を襲撃し、略奪を始めました。久保田少年や開拓団の女性・子どもたちは再び山の中に逃げ込み、さらにそこを群衆に襲われ、ときにひどい暴力を受けながら、ちりぢりになってコウリャン畑やトウモロコシ畑のなかを逃げまどいました。

団長をつとめていた老人は瀕死の呼吸困難の状態になり、自分もう逃げられないから、ここで死なせてほしいと皆に頼みました。躊躇した一行でしたが、懇願する団長の痛ましい姿を見てられず、とうとう2~3人が、「さよなら、さよなら」と声をふりしぼって、団長の首を絞めて息の根を止めました。あとには女性と子どもたちだけが残ります。すると女性たちが、日本に海を渡って逃げるなどできないから、自分たちもここで死ぬしかない、と言い出します。兵士になった夫たちも生きていることはない。自分たち女も、中国人の「おもちゃ」にされるよりは、潔く死んだほうがよい。…そのように女性たちが言い出した背景には、常日頃、軍隊から聞いていた“捕虜となつてはいけない”という教えがありました。

こうして開拓団の73名が、ここで集団自決をしました。最後に残ったのは、久保田少年ともう一人の少年でした。どうやったら死ぬのか、二人は必死に考えます。木で首を吊りたいのに、肝心の紐がない。もう一人の少年は手首に思い切り噛みつきませんが、血管を食い破ることはできませんでした。それで最後に久保田少年たちは、石ころを固く握りしめて、互いの眉間を思い切り殴りあったのです。幾度も幾度も殴打しました。五度、六度…。眉間が割れて血飛沫(しぶき)があがります。久保田少年たちは、さらに出血するよう坂の斜面に頭を下にして横たわり、そのまま失神していきました。

数時間後、激しいスコールがあつて、彼らは意識を取り戻します。体を動かすことができずにいると、日本語のできる中国人がやって来て、久保田さんたちを家にかくまい、食事を与え、新京の街へ行けば日本に帰れるから行け、と言いました。そこから久保田少年のさらなる逃避行が始まります。…その後の彼は、ソ連軍や中国軍に強制労働をさせられ、ようやく故郷に帰りついたのは、1948年7月11日のことでした。

3 南木曾町にも満洲開拓の生き残りがいる

もう一人紹介するのは、可児力一郎さんです。可児さんは8歳の時、読書村・吾妻村(現在の南木曾町)から満洲に渡りました。可児さんのお父さんは郵便の配達員で、田畑を持っていなかったことから、村役場の担当者に「開拓団に行かないのならば食料の配給を止める」と脅されました。やむなく夫婦、可児少年、2歳の弟、生後2カ月の弟が、満洲に渡りました。満洲の冬は想像以上に厳しいもので、学校に登校するとき、吐く息が帽子の頭髪のあいだで凍ってしまい、学校に着いてから帽子が脱げなくなるほどだったと言います。

敗戦間際にソ連軍が攻め込んでくる中、可児さんの村の日本人も必死に逃げ続けました。24日間に及ぶ逃避行のうちに食べ物を口にしたのはわずか5回ほど。何人もの仲間が銃で撃たれて殺されていきました。途中、大雨の後の激流の川を渡るとき、幼児を背負って歩いてきた女性が、もう自分たちはこの川を渡れないと我が子を川に投げ込んだ光景を可児さんは見えています。

100キロ以上の距離を逃げまどって避難所によりやくたどりついたのですが、9月上旬から満洲では霜がおります。飢えと寒さのために村の人々が次々に死んでいきました。死体の山を野犬が食い散らかし、凄惨な光景が広がったと言います。

863人いた南木曾町からの開拓移民のなんと6割以上が日本に戻れずに中国大陸で死亡しました。それでも生き残った人々の多くは、中国人の農場で働く小作人になって、必死に生き続けました。女性の中には、生きるために中国人の妻となった人もいます。可児さんは、虐待ともいえるような地主の仕打ちに耐え続けました。そのようななか、可児さんのことを大切に扱ってくれる中国人に出会います。隣に住んでいた王（ワン）さん一家は、「どんなにつらくてもくじけてはいけません。お前の能力が発揮できる時がかならずくる」と言っただけで食べ物も分けませんでした。銭（チェン）さんは、「お前と会ったのも何かの縁だ」と言って、手先の器用な可児さんに大工の技術を教えてくれました。

こうして可児さんは、13年間の残留生活（13年間も忘れられていたのです）ののち故郷に戻ってきました。南木曾に戻ってからの可児さんは懸命に働き、やがてひのきの箸を製造する可児工芸を設立して、今日に至っています。この間、なお中国に取り残されている日本人の帰国に奔走し、日本と中国の架橋になろうとつとめてきました。

4 満洲移民の歴史から見えてくるもの

私からのメッセージその2は、「どんな状況でも何かできることがある」です。残念ながら久保田さんの村の人々は、もうすべてだめだと思って、集団自決にいたってしまった。けれども可児さんの村の人々は、半数が死んでしまっても、必死で生きのびた。あきらめたらそこで終わりなのですが、もがくことで何らかの道が見えてきたのです。これは、戦争に比べれば過酷ではないのですが、コロナの状況のなかで、皆さんの多くが実感してきたことと通じ合うのではないのでしょうか。「どんな状況でも何かできることがある」。

私からのメッセージその3は、本当に苦しい状況の時に、誰かを憎むのではなく、「人の優しさを見つめ、自分自身が優しくなるようにすることで、未来が開ける」ということです。

久保田さんは、集団自決を生きのびて、中国人にやさしくされて、生涯を日中友好にささげてきました。可児さんもまた、戦争の憎しみを越えて「ひとりの人間」として自分をやさしくいたわってくれた中国人のことを心に刻み、同じようにやさしく人をいたわることを、取り残された日本人に行ってきました。

現代の世界は、アメリカと中国、韓国と日本など、国と国の対立が顕著になってきています。対立が激しくなってくると、相手の国民のすべてが憎い存在に見える。投げかける言葉もきつい非難の言葉になってくる。日本国内はと言うと、コロナの苦しい状況の中で、陽性となった人々への憎悪が日増しに強まっている。おまえのせいでこうなったとインターネットや電話、はては家の前に貼り紙をして、ののしり、差別する。そのために引越しをせざるをえなかった人もいます。

皆さんはどうですか。人に優しくなれますか。芸能人の真似をして、友人に「死ぬ」「殺す」とかひどい言葉を投げつけていませんか。人がもってうまれた性格や外見をバカにするような言動をしていませんか。それは人種差別をする人間と同じではありませんか。コロナ感染者への攻撃も同じです。

苦しいときほど、「自分自身が優しくなるようにすることで、未来が開ける」のです。

今日、紹介した満洲移民の生き残りである可児さんは、現在、88歳で南木曾町にお住まいです。実は、今、放送室の私の隣にいらっしやっています。ここで皆さんへのメッセージをひとこといただきます。

(可児さんのメッセージ)

蘇南高校の皆さん、こんにちは。満洲で悲惨な戦争を経験した私から皆さんに、中国のことわざを紹介します。

ひとつめは、「師徒 如 父子」(先生と生徒は親子のごとし)ということわざです。私が小学生の頃、貧しくて両親もかせぎに出ていたので、毎日自分で作って学校に持って行った弁当は、そまつなものでした。そんなとき私の担任は、そっと自分の弁当のおかずをつまんで私の弁当箱においてくれました。だから、先生に対する感謝の思いは忘れません。

同じく中国のことわざに、「忠言 逆耳 利於行」(忠告は耳障りだが、実はためになる)とか、「良薬 苦口 利於病」(良い薬は口に苦いが、実は病にきく)という言葉があります。ときに、いやだなと思う先生の言葉は、きっと皆さんの人生のためになると、私は思います。

ふたつめは、「寒梅歴尽風雪苦 一到春来満樹香」(風雪の苦しみをさんざん体験した寒梅は、春が来ると木いっぱいにかおりの花が咲く)ということわざです。これは私の人生をふりかえって一番実感していることです。どんなに苦しいことであっても耐えていけば、きっと春に、いっぱいの花が咲くのだと思います。幸せはそこらへんにあって、簡単に出会えるものではありません。苦勞を積み上げてこそ、幸せをつかむことができるのです。

蘇南高校の皆さんに、心を込めて、この言葉を贈ります。

可児さん、ありがとうございます。

では、今日の話をもとめます。

「本当に困っている人のことを忘れないようにしよう」

「どんな状況でも何かできることがある」

「優しさこそが未来をつくる」

そして可児さんからは、「先生との出会いを大切にしよう」「苦勞を積み上げてこそ、幸せになれる」

以上、皆さんへのメッセージでした。